科学

奄美の希少種守れ

行ってみました

わなでマングース駆除

奄美大島（鹿児島県）の深い亜熱帯の森を、豪雨も強風もいとわず黙々と歩き続ける男たちがいる。奄美の希少動物を襲う外来生物「ジャワマングース」を追跡する、42人のハンターたちだ。島からの「完全排除」に立ち上がった「奄美マングースバスターズ」を現地で追った。

（安田幸一）

4月2日当日の朝。島南部にある標高約300㍍の宇検村の森を、滝のような豪雨が打つ。もともと雨の多い島。バスターズの山室一樹さん（52）は気にもかけず、泥が激流となって洗う林道のわきから、ナタで行く手を開いて森に入る。

3㌔ほど続くけもの道に沿って、ジャワマングースを捕らえる塩ビ管のわなが、約50㍍おきに59個設置されている。山室さんは、その一つ一つに、ジャワマングースが好む塩漬けの豚の脂身を仕込んでいく。これに食いつけば、ちょうど胸の辺りをひもが締めつける。もがいても逃れられない。

20年で1万頭

2000万～170万年前に大陸から離れた奄美大島では、動植物が独自の進化を遂げた。この島と隣の徳之島でしか見られないアマミノクロウサギ、世界でも珍しい5本指のオットンガエルなど、多様な希少生物が生息する。

ジャワマングースは、こうした希少な動物たちを次々に襲う。西アジアやインドにすむ体長30㌢、体重500㌘ほどの小型肉食獣で、毒蛇ハブの退治役として1979年に放たれた。だが、ジャワマングースは、危険なハブではなく、島の小動物に矛先を向けた。天敵はいない。最初の30頭前後が、約20年で1万頭にもなったと推定されている。島に固有の生態系は崩れた。

亜熱帯の森

常緑の高木スダジイの樹間をシダが埋める森。霧が立ち込め、蒸し暑い。雨がっぱの中で、シャツが肌に張りつく。ぬれ落ち葉と倒木に足がとられ、崖のような急斜面で何度も転んだ。

こめかみが痛い。触れるとヌルッとする。血だ。眉間も腫れていた。「ブユだね。それより水分はこまめにとってね。熱中症になるから」。そう言いながら山室さんは、あっという間に樹間に消える。

島外出身者も

ジャワマングースの駆除が国の事業として本格的に始まったのは2000年度。当時は年間で数千頭がわなにかかった。駆除をさらに進めるため、環境省は専門スタッフを募集。そこに集まってきた男たちで05年度に結成されたのが、バスターズだ。島の生活に憧れて移り住んだ東京出身のサラリーマン、関西の飲食店員など、島外出身者も多い。

バスターズは、全島の山道に設置した約3万個のわなでジャワマングースを包囲する。手分けしてわなのエサを取り換え、ジャワマングースがかかっているかどうかを確認する日々だ。

彼らの働きは07年度に数字で表れた。捕獲数が前年度に比べて激減し、初期の10分の1ほどになった。島北部では、アマミノクロウサギのふんが目立って増えた。本来の生態系に戻りつつある兆しが見える。

「完全排除」へ

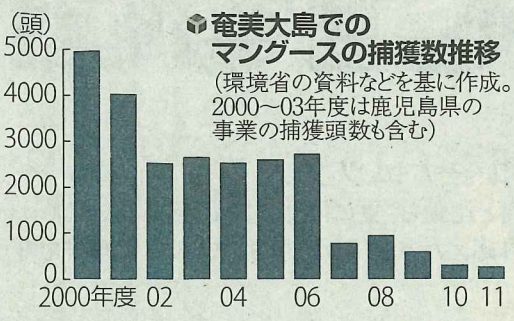
「一番大変なのはこれからです」。昼過ぎには森に日が差し込み、樹冠を激しく揺らしていた風も静まった。山室さんもようやく腰を下ろし、額の汗をぬぐう。

「天敵がいないから、いま手を緩めると、また増えてしまう。最後まで捕り尽くさなければ、本来の生態系は戻らないのです」

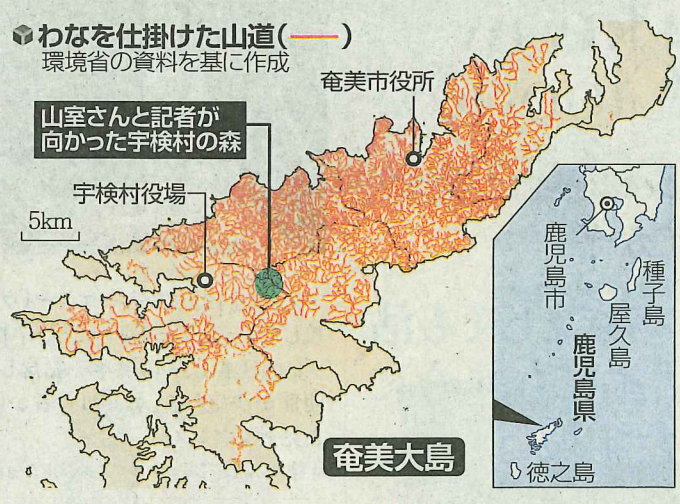
奄美大島を含む「奄美・琉球」（鹿児島県、沖縄県）は、政府が国内5番目の世界自然遺産の登録を目指す。希少種の保護と外来種対策は、登録の重要要件。マングース駆除の成果がカギを握る。

島の土地を買い取ってアマミノクロウサギを守る公益社団法人「日本ナショナル・トラスト協会」（本部・東京）の活動も、今年から始まっている。

バスターズは、完全排除を10年で達成する新計画を、今年度からスタートさせた。道のりは長い。山室さんは立ち上がり、再び森の奥に向かった。



42人の「バスターズ」



上奄美大島の森の中で、ジャワマングースのわなを仕掛けるバスターズの山室一樹さん中塩漬けした豚の脂身を仕掛けたわな。マングースがえさに食いつくと、管の中にあるひもが胸を締めつけて捕らえる仕組みだ下希少種を襲うマングース（環境省提供）